

『サンディトン』の可能性

川口能久

I

ジェイン・オースティンは1816年8月6日に『説得』を完成させたあと、1817年1月27日に『サンディトン』を書き始めた。しかし病気のため¹⁾、彼女が亡くなる丁度4か月まえの3月18日に、第12章の、多分途中まで書いたところで中断した²⁾。全体の6分の1から4分の1程度ではないかと推測されている³⁾。

オースティンはしばしば作品を完成させるまでに何度も書き直しをする。『サンディトン』は、しかし、未完の断片であり、オースティンの他の小説とは異なり、書き直しされていない。したがって、この作品には未確定の要素が多く、最終的にどのような作品になったかを予測することは不可能である⁴⁾。たとえば、『サンディトン』というタイトルはオースティン自身がつけたものではなく、家族がつけたタイトルである。草稿にはタイトルはなく、オースティンは『兄弟たち』(“The Brothers”)というタイトルを考えていたという⁵⁾。

誰がヒロインなのかも定かではない。パーカー夫妻に同行して、サンディトンを訪れるシャーロット・ヘイウッドは一見ヒロインらしく見える⁶⁾。実際、語り手自身、彼女のことを「わたしのヒロイン」⁷⁾と呼んでいる。しかし彼女の役割はむしろ常軌を逸した人物や出来事を観察し、批判することにあるようだ。作者の代弁者であり、常識的な考え、価値観、視点を導入する役割を果たしているとも言える。第7章でレディ・デナムは彼女とサー・エドワード・デナムとの関係を疑うが、彼女はそのような関係を否定している。彼女はあくまで観察者であり、プロットと直接かかわりそうもない。

クララ・ブリアトンがもっともヒロインらしく見える。彼女は頼るものもなく哀れで、世話になっている親戚の負担となっていた。彼女には「子守り」(168)になるぐらいしか道はなかったのだが、レディ・デナムが彼女をロンドンからサンディトン・ハウスに連れ帰ったのである。彼女に対する偏見があるにはあったが、6か月もすると、彼女は良識や長所、優しい気立てや美しさのために「みんなのお気に入り」(168)となっていた。シャーロットに言わせれば、彼女は「完璧なヒロイン」(179)ということになる。彼女の境遇や性格はファニー・プライスを強く連想させる。最後の章で、エドワードと密会している場面がとりわけ印象に残る。しかし金目当てに結婚するというエドワードの魂胆が分かっているながら、なぜ彼女は彼と密会しているのだろうか。今後、ヒロインとしてプロットに深くかかわることが予想される。

ミス・ラムもヒロインの候補者の一人である。ダイアナ・パーカーによれば、「ミス・ラムは莫大な財産を持っていて、(略)とても体が弱い」。(195)レディ・デナムは彼女とエドワードの結婚を目論んでいるし、西インド諸島出身の金持ちで、黒人の血が4分の1混ざっている(half mulatto)という設定は、異人種間結婚(miscegenation)や、『マンズフィールド・パーク』では必ずしも前景化

されなかった西インド諸島をめぐるプロットが展開する可能性を秘めていると言えよう⁸⁾。しかし彼女は話題にのぼるだけで、実際に登場することはない。結局、誰がヒロインなのか、断定的なことは分からないのである。

ヒーローも定かではない。トマス・パーカーは、つぎに見るように、かなり戯画化されている。彼は投機に取りつかれており、ヒーローというよりも、プロットを動かす役割を果たしている。

エドワードは、軽薄な誘惑者で、ジョージ・ウィッカム、ジョン・ウィロビー、ヘンリー・クロフォードを想起させる。ロマン派の詩や感傷小説 (sentimental novel, novel of sensibility) を無批判に読み過ぎたために、女性を誘惑し、何か悪いことをしなければならぬと信じ込んでいるのである。彼がヒーローとは考えにくい。

シドニー・パーカーがもっともヒーローらしい人物である。「とても綺麗な馬車」(210) に乗って登場するシドニーはつぎのように描写されている。「シドニー・パーカーは 27, 8 歳で、とてもハンサムで、くつろいで洗練された物腰で、生き生きとした表情をしていた」。(210) オースティンが『兄弟たち』というタイトルを意図していたとすれば、シドニーがヒーローとなり、中心的な役割を果たすと思われる。しかし彼は最後の第 12 章になって初めて登場するだけで、彼がこの小説のヒーローだとは断定できない。結局、最終章まで進んでも、ヒロインやヒーローは不明なままなのである。

プロットの展開も不明である⁹⁾。『サンディトン』というタイトルのために、投機やリゾート開発といったことに注意が向けられている。しかし、さきに触れたように、オースティン自身が考えていたタイトルが『兄弟たち』だとすると、パーカー 3 兄弟 (トマス、シドニー、アーサー) を中心にプロットが展開することになるが、残された断片から判断する限り、そのような展開になるとは考えにくい。シドニー、エドワード、クララ、ミス・ラム —— この 4 名の関係を中心に、リゾート開発やレディ・デナムの遺産相続問題がからんでプロットが展開していくものと思われるが、具体的な展開や結末については何とも言えない¹⁰⁾。マリッジ・プロットと投機や心気症に対する風刺とが調和しないのではないかと、という懸念も拭いきれない。

以上のように、『サンディトン』は未完の断片であり、多くの未確定な要素を含んでいるが、これまでのオースティンの小説には見られなかった特徴を備えていることも事実である。われわれが『サンディトン』に対して抱く最大の関心は、オースティンがもっと生きていれば、どのような小説を書いていたか、ということであろう。ここではそのような特徴を指摘し、オースティンがどのような小説を書こうとしていたのか、その可能性を探りたい。

II

『サンディトン』のテーマは、これまでの 6 小説とは大きく異なる。これまでの小説においては、もちろんいろいろな相違はあるが、基本的にはヒロインの結婚がテーマとなっていた。『サンディトン』においても、エドワード、シドニー、クララ、ミス・ラムの恋愛、結婚を中心にプロットが展開する可能性は否定できないが、この作品では明らかに投機やリゾート開発といった社会的、経済的問題が大きなウエイトを占めている。これは従来の小説には見られない特徴である。

このことは、『サンディトン』の舞台からも明らかであろう。これまでの 6 小説においては、田舎

の3, 4家族やカントリーハウスと呼ばれる田舎の邸宅が物語の舞台であった。『エマ』は文字通り田舎の3, 4家族を中心とする共同体を舞台とし、『高慢と偏見』や『マンスフィールド・パーク』ではそれぞれペンバリーやマンスフィールド・パークが重要な役割を果たしている。ノーサンガー・アビーも、もとは修道院ではあるが、改修され近代的な邸宅となっている。ところが『サンディトン』の舞台はリゾート開発の進む村なのである。このことは、この作品において、投機やリゾート開発が大きなウエイトを占めていることを端的にしめしている。『サンディトン』というタイトルは、作者自身がつけたタイトルではないとしても、小説のテーマを的確にあらわしているのである¹¹⁾。

作品の冒頭も6小説とは大きく異なっている。『ノーサンガー・アビー』と『エマ』はヒロインの説明から始まり、『分別と多感』『マンスフィールド・パーク』『説得』はヒロインの親戚やヒロインが属する一家の説明、言い換えれば、これから始まる物語の背景の説明から始まっている。ところが『サンディトン』では主要人物が遭遇する事故から始まっているのである。パーカー夫妻はサンディトンで開業する医者を探すためにウイリンデンという村を訪れる。ところが夫妻の乗った馬車が転覆し、ミスター・パーカーは足首を捻挫する¹²⁾。つまり、パーカー氏の投機の見論がすべての発端なのだ。いまパーカー夫妻と言ったが、冒頭では「ある紳士とその夫人」(155)あるいは「旅行者」(156-158)と書かれているだけで、彼らの名前が明らかにされていないわけではない。これは、個人よりも投機家というタイプをえがこうとしたことが一つの理由と考えられる。以上のような作品の冒頭も、この小説において、投機やリゾート開発が大きな役割を果たしていることをしめしていると言えよう。

ヴァージニア・ウルフは「ジェイン・オースティンはヘンリー・ジェイムズやプルーストの先駆者になっていただろう」¹³⁾と述べている。これまでの6小説、特に『エマ』や『説得』を読めばそのように予想するのは当然なのだが、ウルフの予想は裏切られることになる。『サンディトン』には詳細な心理描写はほとんどなく、6小説以上に強い風刺が見られるからだ。実際、かなりの部分が風刺に充てられており、そのため初期の作風にもどったことが指摘されている¹⁴⁾。風刺のおもな対象は、執政時代 (the Regency) を中心に流行していた投機やリゾート開発、心気症 (hypochondria)、熱狂的なロマン主義や感傷小説であり、それらをかなり極端な形で体現する人物が登場する。『サンディトン』の特徴の一つは、そのような人物が著しく戯画化されていることである。

『サンディトン』の中心テーマである投機やリゾート開発ともっとも深くかわるのはミスター・パーカーとレディ・デナムである。ジェントリーに属する地主とレディの称号をもつ70歳の女性がリゾート開発という金儲けに熱をあげている。このこと自体、オースティンの小説においては画期的なことと言わなければならない。

ミスター・パーカーは「サンディトン教区」(159)の地主である。これまでのオースティンの小説の地主とは異なり、サンディトンという村に投資をし、リゾートとして売り出すことに躍起となっているのである。

サンディトンのこととなると彼は熱狂的であった。サンディトン——サンディトンを小さくして、流行の海水浴場として成功させることが、彼の生きる目的であった。ほんの数年前まで、そこはただの、静かな村であった。しかし、その村が地の利を得ていることといくつかの偶然の条件のために、彼ともう一人のおもだった地主は、この村の開発が利益をもたらす投機になるのではないかと考えた。二人はこの投機にのめり込み、企画し、開発し、褒めそやし、大げさ

に宣伝し、少し知られるところまで持ち上げたのである。ミスター・パーカーは、ほかのことはほとんど考えられなかった。(161-2)

さらに語り手は「サンディトンは彼にとって第二の妻であり4人の子供であった。(略)サンディトンは彼の鉱山であり、宝くじであり、投機であり、揺り馬であり、職業であり、希望であり、未来であった」(163)とつづけている。ミスター・パーカーは潮風の効用やサンディトンの素晴らしさを力説するが、ミスター・ヘイウッド¹⁵⁾の反応はいたって冷静である。

「はい、サンディトンのことは聞いたことがあります」とミスター・ヘイウッドは答えた。「5年おきに、海岸の方のどこか新しい場所が、目立って、もてはやされるということを耳にします。どうしてその半分も人で一杯になるのか、不思議です。そんな場所に行く金と時間のある人はどこにいるのでしょうか！国にとってよくないことです。確実に食料の値段を上げることになりますし、貧乏人を役立たずにしてしまうことになるのではないのでしょうか」。(159)

熱いミスター・パーカーと冷めたミスター・ヘイウッドの遣り取りはユーモアに富んでいる。言うまでもなく、オースティンの意見はミスター・ヘイウッドによってあらわされており、オースティンはミスター・パーカーの投機熱を風刺しているのだが、その風刺は決して辛辣ではない。いかにもオースティンらしく、むしろユーモアが感じられる。

レディ・デナムは「サンディトンの偉大な婦人」であり、「投機におけるミスター・パーカーの共同出資者」(165)である。彼女は最初の夫から地所を、二番目の夫からはレディという称号を受け継いだ。つまり二度の結婚で財産と社会的地位を手に入れたしたたかな女性である。彼女には何千ポンドもの年取があり、彼女の周りには財産を相続しようとしている3組の人たちうごめいている。確かに彼女は「サンディトンの偉大な婦人」であり、「大変な金持ちの老婦人」(165)なのだが、彼女に問題がないわけではない。サンディトンに向かう馬車のなかで、ミスター・パーカーはシャーロットにレディ・デナムについてつぎのように語る。

「ときどき」と彼は言った。「少し自惚れるところがありまして——気にはならないのですが。ときにはお金に対する愛着が行きすぎる場合があります。でも彼女は気立てのいい、とても気立てのいい女性です。とても親切で、親しみやすいお隣さんです。陽気で、独立心の強い、立派な方です。彼女の欠点はすべて教育を受けていないせいでしょう。生まれつきの分別はあるのですが、磨かれていないのです。70歳の女性にしては、見事な、健康的な体と見事な、しっかりとした頭をお持ちです。本当に立派な気持ちでサンディトンの改良に加わっておられます。もっともときどき狭量さ顔を出すことがあります。さきの見通しがきかないのです。1, 2年もすれば元手がとれることを考えずに、目先の、わずかな支出を警戒するのです。つまり、あの方とは考え方が違う、ときどきものの見方が違うことがあるということです」。(166)

確かに同じ投資家と言っても、何でも都合のいいように考えるミスター・パーカーと損をすることを極度に恐れるレディ・デナムとはかなり異なる。ミスター・パーカーは、保養客を集めるためにサンディトンに医者連れてこようとするが、レディ・デナムはそのことに反対する。「近くに医

者がいれば、使用人や貧乏人が病気だと思い込むように仕向けるだけだ」(181) というのがその理由である。彼女は寄宿学校の生徒（実際には、ダイアナの間違いでサンディトンには来ない）のなかには肺病の生徒がいるかもしれず、その生徒に自分が飼っているロバの乳を売りつけようとも考える。第7章の最後のパラグラフでシャーロットがいみじくも指摘しているように、レディ・デナムは、要するに、けちなのである。

レディ・デナムは西インド諸島出身の人がやってきてお金を使えば、生活必需品や肉の値段が上がるのではないかと心配する。彼女はデナム兄妹をサンディトン・ハウスに逗留させようとはしないが、そんなことをすればハウスメイドの給料を上げなければならないからである。これまでの6小説に、登場人物、特に結婚相手の年収を気にするものはいても、物価上昇や使用人の給料のような生々しい経済問題を気にするものはほとんどいなかった。『サンディトン』の、ヴィクトリア朝小説的な、新しい側面の一つと言えよう。

残念ながら、ミスター・パーカーやレディ・デナムの思惑通り、投機が成功するとは考えにくい¹⁶⁾。失敗しそうな兆候ばかりで、成功しそうな兆候がまったくないからである。そもそもミスター・パーカーは最初から間違いをおかしている。医者のある村を間違え、乗っていた馬車が転覆し、足首を捻挫するという冒頭は、いかにも示唆的だ。「判断力」よりも「想像力」(162)の勝るミスター・パーカーは、すべて自分にとって都合のいいように解釈する。ミスター・ヘイウッドの羊飼いと3人の老女が住むありきたりのコテージを医者の家と思い込み、医者はいないと言われると、医者共同経営者の家と考える。彼は昨年医者がいないために少なくとも1家族がサンディトンに来るのをやめたと信じているが、もちろん根拠はない。ストリンガーと息子の店はあまりはやっていないが、いずれ必ずうまくいくと考える。しかし、これも思い込みに過ぎない。第6章の冒頭でえがかれているように、テラスも、崖も、砂浜も静まり返り、商店も閑散としている。貸本屋の予約リストには大した名前はなく、期待したよりも数も少ないことに失望するが、8月、9月になれば盛り返すだろうと都合のいいように考える。ダイアナ・パーカーも間違いをおかす。彼女はサンディトンに「2組の大家族」(176)を送り込むつもりをしていたが、その2家族は同じ家族で、実際には4名の1家族に過ぎなかったのである。

以上のように、サンディトンの投機に現を抜かすミスター・パーカーとレディ・デナムは揶揄され、リゾート開発も成功しそうにはない。オースティンは兄の銀行が倒産した経験から、投機が危険を伴うことを熟知していた¹⁷⁾。彼女が執政時代に流行していたリゾート開発ブームに否定的な見方をしていたことが窺われる。

心気症とは、神経症の一つで、実際には病気ではないのに心身の不調に悩み、重い病気ではないかと恐れる状態のことである。自分の健康状態や体の調子に異常にこだわり、心配するのが特徴である。英語では「病名としてではなく、たんに自分の健康に気をつかいすぎ、つねに身体の不調を訴えるが、医師に見せてもどこも悪いところがみつからないという程度の人に対して、いささか侮蔑的に使われることが多い」¹⁸⁾。ごく簡単に言えば、病気でもないのに、病気だと思い込む人のことである。

オースティンのこれまでの小説にも心気症を思わせる人物は登場している。『マンスフィールド・パーク』のレディ・バートラムや『エマ』のミスター・ウッドハウスやイザベラ・ナイトリーなどである。しかし、『サンディトン』に登場する心気症患者、すなわちパーカー家のダイアナ、スーザン、アーサーは彼らの比ではない。『サンディトン』では、この3名が風刺の対象となり、揶揄され

ているのである¹⁹⁾。

ダイアナ・パーカーは、発作的な胆汁症のために、ほとんどベッドからソファに動くこともできない、サンディトンに行くことはまったく不可能で、「いまの状態では、潮風にあたるのは死ぬようなものだ」(175)と手紙に書きながら、突如スーザン、アーサーとともにサンディトンにあらわれ、じつに活動的に動き回るのである。シャーロットの頭には思わず「わけの分からないおせっかいだわ！行動が狂ってしまっている」(196)という言葉がよぎる。彼女がサンディトンに2組の家族を送りこもうとして間違いをおかしたことにはすでに触れた。

スーザン・パーカーもダイアナに劣らぬ心気症患者である。彼女は頭痛を治すために10日間つづけて、1日に6匹の蛭に血を吸わせ、それでも治らないので歯を3本抜いてしまった。頭痛はよくなったが、神経がまいってしまい、アーサーが咳を我慢しようとしただけで、二度も失神してしまうのである。彼女はダイアナ同様、ひっきりなしに夜のあいだしゃべりつづける。シャーロットには「病気の兆候」(199)などまった認めることができないのである。

アーサー・パーカーはきわめて健康的な心気症患者である。ミスター・パーカーによれば、一番下の弟であるアーサーはダイアナやスーザン同様、ひどい病人で、虚弱なため仕事に就こうともしない。シャーロットは小さくてひ弱な若者だと想像していたのだが、彼女は実際のアーサーにあって驚く。彼は兄と同じくらいの背丈で、兄よりも丈夫な体つきで、ぼんやりした顔つきを除けば、病人らしいところはどこにもなかったからだ。湿った空気にあたるとリューマチになるとか、神経過敏だとか言いながら、食欲は旺盛である。薄めのココアがいいと言いながらかなり濃いココアを飲み、姉たちの目を盗んでバターを厚く塗ったトーストを平らげる。アーサーは温かい部屋と美味しい食事を必要とする病気にしかかからないと決めているのだ、とシャーロットは考える²⁰⁾。

パーカー家の人々に対する批判は、シャーロットの考えを通してあらわされている。潮風にあたるのは死ぬようなものだと言ったにもかかわらず、サンディトンに居つづけるダイアナを見て、シャーロットはこう考える。

常識では考えられないような病気や快復は、本当に病気になったり快復したのではなく、何もすることがなくて、何かしたくてしたくて仕方のない人が楽しんでいるだけように思われた。パーカー家の人々は間違いなく想像力と敏感な感情の持ち主なのだ——長男は開発者としてあり余った感情のはけ口を見つけ、姉妹は恐らく奇妙な不満を作り出して感情を発散するよう駆り立てられていたのだ。(198)

パーカー姉妹について、語り手はつぎのように批判している。

パーカー姉妹は思いやりのある心と優しい気持ちの持ち主であった。しかし何かしていないと落ち着かない気持ちとほかの誰よりも多くのことをしているという誇りが、すべての善行にあらわれていた。彼らが耐えたことだけでなく、彼らのすべての行いに虚栄心があった。(198)

さきに見たように、これまでの小説にも心気症を思わせる人物は登場しているが、これほど極端な心気症患者はいなかった。オースティンは、自分自身の病気を紛らわすために、病気を気にしすぎる人を皮肉ったのかもしれない。あるいは、彼女の母親が心気症であったことが影響しているの

かもしれない²¹⁾。いずれにせよ、心気症の風刺に深刻さはなく、オースティンはシャーロットに3人の患者を適切に批判させ、あくまで喜劇的にえがいている。このことは、病気がきわめて重篤であっても、彼女の喜劇的精神が健在であったことをしめしている。

熱狂的なロマン主義や無批判な感傷小説崇拜も風刺の対象となっている。第7章において、エドワードはおもに詩について長広舌を揮う。彼は「感情の人」(184)にふさわしく、海や海岸から語りはじめ、ロマン派の詩人たち——スコット、バーンズ、モンゴメリー、ワーズワス、キャンベル——について熱く語る。「スコットの海についての美しい詩を読んで感動しないものは、暗殺者の神経をもっているに違いない」(184)と断定し、バーンズが傑出していることを熱を込めて訴えるのである。このようなエドワードをシャーロットは、例によって、冷静に批判するが、もちろん、それはオースティンの批判でもある。

「でもわたしはある人の詩とその人の性格を完全に切り離すほど詩人らしくありません。バーンズの有名な不品行のために、彼の詩を楽しむことができません。恋人としての彼の気持ちに偽りがなかったとは考えにくいのです。彼がえがいた人物の愛情の誠実さを信じることはできません。彼は感じ、書き、そして忘れてしまったのです。」(185)

エドワードは反論するが、シャーロットは彼をどうしようもない馬鹿だと考えはじめる。「彼はとても感傷的で、何らかの感情にあふれている。最新の難解な言葉に夢中になるが、明晰な頭脳をもっていないのだ」(186)と彼女は考えるのである。

第8章において、エドワードはおもに小説についてまくしたてる。エドワードによれば、自分は決して見境のない小説の読者ではない。「ありきたりの貸本屋にあるただのがらくたのような本」(190)をもっとも軽蔑している。自分が認める小説は人間性をえがいた小説であり、そのような小説では「高邁な思想、果てしない視野、無限の情熱、不屈の決断」(190)が見事にえがかれているのである。エドワードの話聞いたシャーロットは簡潔にこう答える。「おっしゃることを正しく理解しているとしたら、わたしたちの小説の趣味はまったく違います」。(190)

エドワードが力説している小説とは、感傷小説である。頭の良くなかったエドワードは「悪漢の魅力、気力、聡明さ、粘り強さ」(191)に感動し、悪漢の企みが成功することを期待するようになる。彼はとりわけリチャードソンに心酔する。自分はラヴレイスのような危険な男だと考え、女性を誘惑しようとする。美しい女性には慇懃にし、可愛い娘なら誰にでも声をかけるが、彼が本気で誘惑しようとしたのはクララだけであった。彼女がレディ・デナムの遺産相続の競争相手でもあるからだ。この二人は最終章で密会するが、その後二人がどうなるかは分からない。

『ノーサンガー・アビー』同様、『サンディトン』においても、オースティンは無批判に文学作品を読むことの愚かさを揶揄している。キャサリン・モーランドはゴシック小説の影響を受け、妄想を抱くが、妄想に気づき、立ち直る。語り手が指摘しているように、「シャーロットはとても分別のある若い女性で、想像力を楽しませるほどには小説を読んではいたが、小説から理不尽な影響を受けることは決してなかった」。(180)しかしエドワードが感傷小説を鵜呑みすることの愚かさに気づく気配はまったくない。彼の姿は滑稽であり、彼もまた戯画化されているのである。

III

『サンディトン』は論じにくい作品である。『サンディトン』は未完の断片であり、最終的にどのような作品になったか、結局、想像や推測の域をでないからである。しかし、これまで指摘してきたように、『サンディトン』は完成された小説とは明らかに異なる特徴を備えている。その一つは風刺の割合が高く、風刺の対象となる人物が戯画化されていることである。この点で、習作期の作風に戻ったことはさきに触れた。この断片の多くは、投機やリゾート開発、心気症、熱狂的ロマン主義や感傷小説の風刺に割かれている。しかしどの風刺にも辛辣さや深刻さはなく、あくまで喜劇的にえがかれており、重篤な病気にもかかわらず、オースティンの喜劇的精神が健在であったことを窺わせる。

オースティンのこれまでの6小説のもっとも中心的なテーマは、ヒロインの結婚であった。しかし『サンディトン』の中心的なテーマは投機であり、リゾート開発である。また、この作品では物価上昇や使用人の給料など、これまであまり話題にならなかったことが話題となっている。単純化して言えば、オースティンは個人や狭い共同体よりも社会、あるいは、これまで以上に社会的な人間をえがこうとしたように思われる。このような意味において、オースティンがディケンズのような、ヴィクトリア朝的な小説を書こうとしたという指摘は正しいと言えよう²²⁾。『サンディトン』の文学作品としての評価は必ずしも高くない²³⁾。しかしオースティンは確実にこれまでの小説とは異なった小説を書こうとしていた。『サンディトン』はそのような可能性をしめしているのである。

注

- 1) Natalie Tyler, *The Friendly Jane Austen* (New York: Penguin Books, 1999), 227: 一般にアディソン病 (Addison's disease) と言われているが、ホジキン病 (Hodgkin's disease) との指摘もある。
- 2) James Edward Austen-Leigh, *Memoir of Jane Austen*. Ed. R. W. Chapman (Oxford: The Clarendon Press, 1926), 192; Deirdre Le Faye, *Jane Austen: A Family Record*, 2nd ed. (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2004), 243; Paul Poplawski, *A Jane Austen Encyclopedia* (Westport: Greenwood Press, 1998), 259.
- 3) Cf. R. W. Chapman, *Jane Austen: Facts and Problems* (Oxford: The Clarendon Press, 1948), 208 : Chapman は『エマ』程度の長さになるのではないかと考えている ; B. C. Southam, "Introduction," *Sanditon: An Unfinished Novel by Jane Austen* (Oxford: The Clarendon Press, 1975), vii; サザムは全体の五分の一か六分の一程度ではないかと推測している ; 中尾真理『ジェイン・オースティン——象牙の細工——』(英宝社, 2007), 264; 吉野由利『『サンディトン』』『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』内田能嗣・塩谷清人(編)(世界思想社, 2007), 256.
- 4) Cf. Austen-Leigh, 192-193; Southam, xv-xvii.
- 5) Cf. Southam, vii; Jane Austen, *Minor Works*. Ed. R. W. Chapman. *The Novels of Jane Austen*. Vol. VI (London: Oxford Univ. Press, 1975), 363; 塩谷清人『ジェイン・オースティン入門』(北星堂書店, 1997), 263-264.
- 6) Cf. E. M. Forster, "Jane Austen," *Abinger Harvest and England's Pleasant Land*. The Abinger Edition 10 (London: Andre Deutsch, 1996), 146; Peggy Huey, "Jane Austen's *Sanditon*," *A Companion to Jane Austen Studies*. Ed. Laura Cooner Lambdin and Robert Thomas Lambdin (Westport: Greenwood Press, 2000), 256; 中尾, 278-280.
- 7) Jane Austen, *Lady Susan, The Watsons and Sanditon*. Ed. Margaret Drabble (London: Penguin Books, 2003), 182. *Sanditon* からの引用は本書により、ページ数を記す。邦訳は、都留信夫(監訳)『サンディトン ジェイン・オースティン作品集』(鷹書房弓プレス, 1997)を参考にした。

- 8) William H. Galperin, *The Historical Austen* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2003), 239.
- 9) Cf. Janet Todd, "Lady Susan' 'The Watsons' and 'Sanditon,'" *The Cambridge Companion to Jane Austen*. 2nd ed. Ed. Edward Copeland and Juliet McMaster. (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2011), 95-96.
- 10) Le Faye, 243: オースティンは Anna にもプロットや結末について話してはいなかった。
- 11) 言うまでもなく、Sanditon という架空の地名を考案したのはオースティンである。John Lauber, *Jane Austen* (New York: Twayne Publishers, 1993), 112: Sanditon とは "Sandy Town" であり、Matthew 7:26 に言及している。
- 12) 「足首」と表記したが、オースティンは "foot""ankle""leg" という語を用いている。
- 13) Virginia Woolf, "Jane Austen," *The Common Reader: First Series* (London: The Hogarth Press, 1962), 183.
- 14) Cf. Lauber, 8; Todd, 93; Douglas Bush, *Jane Austen* (New York: Collier Books, 1975), 187.
- 15) Lauber, 112-113: Heywood とは hay and wood であり、「大地に根差した生活」を含意している。
- 16) Cf. 中尾, 283-284; 榎本みな子『オースティンの小説とその周辺』(英宝社, 1984), 145-148.
- 17) Drabble, "Introduction," *Lady Susan, The Watsons and Sanditon*, 27; Poplawski, 261.
- 18) 新井潤美『自負と偏見のイギリス文化——J・オースティンの世界』(岩波書店, 2008), 144-145.
- 19) Cf. Drabble, 23-24.
- 20) 吉野, 260-262 参照.
- 21) Cf. Tyler, 221, 228; F. B. Pinion, *A Jane Austen Companion* (London: Macmillan, 1973), 133.
- 22) Cf. Lauber, 107, 111 ; Poplawski, 260; Todd, 94; Tyler, 219; Julia Prewitt Brown, *Jane Austen's Novels: Social Change and Literary Form* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1979), 127-128; Jan Fergus, "Making a Living," *The Cambridge Companion to Jane Austen*, 157.
- 23) Cf. Forster, 145-146; 中尾, 264-267.

(本学文学部教授)